85 章：エディンバラにおける騒擾

章目次

⑴チャールズとスコットランド人・・・2

⑵新祈禱書が作られる・・・11

⑶新祈禱書の使用が命じられる・・・17

⑷エディンバラの第 1 騒擾（1637 年 7 月 23 日）・・・20

⑸エディンバラの第 2 騒擾（同 9 月 25 日）・・・31

⑹エディンバラの第 3 騒擾（同 10 月 18 日）・・・35

⑴チャールズとスコットランド人

（1633 年、チャールズとスコットランド人）

チャールズ1)はスコットランド生まれであったが、彼の南の王国のことよりも北の王国のことをさらに知らなかった。子どもの頃から一度きり、ごく短い期間その地を訪ねたことがあるだけだった。その時の訪問では、主教による教会統治に対して貴族たちの不満が爆発しているのを目の当たりにした。その主教による教会統治を、貴族たちはジェームス 1 世が長老制教会に課そうとしたときに、それを熱心に助けたのであったが2)。

（貴族と主教）

ジェームス 1 世が長老制教会に主教による統治を課したあと、貴族たちは聖職者たちを軛（くびき）につなぐことによって、かえってライバルをつくってしまったことに気がついた。スコットランドの至る所で、主教たちは貴族たちを押しのけつつあった。セント・アンドリュース大主教はスコットランドの大法官になった3)。他の主教も枢密会議のメンバーになった。議会が開かれるときはいつでも、主教たちは立法会議4)のメンバーの選任を一手に引き受けた。そして、立法会議の決定に逆らってみても、うまくいく見込みが少ないことは経験済みであった。農村部では、主教たちは貴族たちが自分たちだけに帰属するものと考えていた民衆からの尊敬や服従を自分たちにも要求した。たしかにチャールズは、教会財産の保有者に、その者の父が奪った地所に対する正当な権利を与え、実際、復活した主教区の基本財産に供するための土地をイングランドの金で購入したが、それでも、（王は早晩、前の世代の土地所有者が教会から没収した土地を自分たちから再没収するつもりなのではないだろうか）という貴族たちの疑念

---

1) チャールズ 1 世（1600－1649，イングランド・アイルランド国王としての在位：1625－1649，スコットランド国王としての在位：1625－1649）（ref: Mark A. Kishlansky and John Morrill, *Charles I*, DNB）

2) ref: *HE 3*, ch. 28 (p. 220ff)

3) John Spottiswoode (1565 – 1639) のこと。セント・アンドリュース大主教（1615 - 1639)。スコットランドの大法官（1635 - 1638）(ref: A. S. Wayne Pearce, *Spottiswoode, John*, DNB)

4) 立法会議：原文 “Lords of the Articles”。スコットランド議会の常設委員会。議会に提出される法案の起草を行ったり、準備を行ったりする委員会。この場合の “article” とは 1 つの法律の各条項のこと。(ref: OED, article, *sb.* 4. b. *Sc. Hist.*)

を払拭することはできなかった5)。よって、圧倒的多数の貴族が主教を徹底的に嫌った。嫌っていないごく少数の者たちも、主教のために指一本動かそうとは思わなかった。すべてのスコットランド貴族の中でロード・ネイピア6)(あの、「対数(logarithm)」の発明者の息子)ほど国王に忠実な男はいなかった。しかし、その彼も主教たちが政治的高みに押し上げられたことに関しては、ロシス7)やラウダウン8)と同じように許せなかった。彼は手紙の中で書いている。「主教に能力があるということは神と人の法にかなっています。しかし、彼らに広大な地所を与え、国家の大官に就かせるということは、教会のためにならないし、国王のためにもならないし、国家のためにもならないのです」と9)。

---

5) チャールズは 1625 年 10 月に Revocation Act を発布し、宗教改革のときに貴族の手に渡った教会財産を王室に取り戻そうとしたが、貴族から反発が起き、委員会が設けられ、そこで話し合われ、その結果、土地は引き続き現在の保有者のもとに残るが、その代わり、国王に賃貸料を支払うことになった。(つまり、国王の所有権は認めるということだろう。)(ref: *HE7*, ch. 72, pp. 277-279 ; *Donaldson*, pp. 296-297)

6) Archibald Napier, Lord Napier of Merchistoun (c.1575-1645) 数学者マーチストンのジョン・ネイピア(1550－1617)の息子として生まれる。1627 年にロード・マーチストンのネイピアとして貴族に列せられる。(David Stevenson, *Napier, Archibald, first Lord Napier of Merchistoun*, DNB)

7) John Leslie, 6th Earl of Rothes (c.1600-1641) 政治家。(ref: Vaughan T. Wells, *Leslie, John, sixth earl of Rothes*, DNB)

8) John Campbell, Earl of Loudoun (1598-1662) 政治家。(ref: David Stevenson, *Campbell, John, first earl of Loudoun*, DNB)

9) 原注：Napier, *Memorials of Montrose*, i. 70. (*HE8*, 305)

（スコットランド教会）

もしもチャールズが、スコットランド教会を彼がスコットランドを訪れたときのままにしておくことで満足していたならば、その後貴族が彼に抵抗するために勇気を振り絞るなどということはほとんど起こらなかっただろう。たしかに、貴族の小作に対する力は、イングランドの土地所有者のそれと比べればはるかに大きかったが、それでも彼らの父親たちのときに比べれば劣っていた。中間階層がその重要さの面においても結集力の面においても成長してきていた。農民たちでさえも、自分たちの導き手として領主よりも牧師を当てにしていた。また、最近まで聖職者たちはほどほどに満足していた。たしかに、まだあちらこちらに前の世代の極端な長老主義を信奉している者もいた。多くの者がパース条項10)に対して深刻な不満を感じていた。しかし、彼らの物質的な楽さ加減はチャールズとその先代のジェームスによって大幅に増進された。近隣の土地所有者を犠牲にして。また、主教は彼らの教区奉仕活動にほとんど干渉して来なかった。とりわけ、彼らは自由にカルヴァン派信条を説教することができた。また、心ゆくまでカトリックやアルミニズムに対して批判をぶちまけることができた。いかなる国王宣言も彼らをイングランドの牧師とは異なって、論争となっている事柄に関して詳細に語ることを控えるようには拘束しなかった。また、廃れた儀式を是認するものとして引用されるいかなる教会法も典礼指図11)も存在しなかった。

（聖餐式におけるひざまずき）

10）パース条項：ジェームス 1 世から提案され、1618 年、パースで開かれた聖職者の全体集会で半ば強制的に採択されたもの。（HE3, 236）5 箇条から成り、その内容は、1. 聖餐は常にひざまずいた姿勢で受けられること、2. 病気ややむを得ないときは、主の晩餐は私宅において執り行われること、3. 洗礼も 2 と同様のときは、2 と同様に執り行われること、4. キリストの生誕・受難・復活、聖霊の降臨を記念するための祝日が設けられること、5. 子どもたちが祝福を受けるために主教のもとに連れて行かれること、であった。（HE3, 222）この中でもっとも問題となったのは、1 である。なぜならば、陪餐（ばいさん）者からすると、ひざまずくという行為が、神自体を崇敬するのではなく、聖別されたパンやぶどう酒を偶像崇拝的に崇拝することになるのではないかと危ぶまれたからである。（青柳,「18 世紀におけるスコットランド主教制教会と祈禱書」, 197）（その他参考文献：『スコットランド通史』pp. 180-181）

11）典礼指図：原文“rubrics”。“rubric”は、この場合は、法文などに添え書き的に付加される、注釈的なもの、注釈的な指示。通常は赤字で記載された。今はイタリック体などで明示されている。当然、本文と同様、守るべきものとなる。

たしかに、「聖餐を受けるときにはひざまずけ」というパース条項の指示は少なからず反発を呼び起こした。時には、牧師が会衆にひざまずくように求めると、皆、教会から出て行ってしまい、牧師一人が聖卓のところに取り残されるということも起こった12)。しかし、全般的には主教がこのような不適切なことに目をつぶったためか、あるいは、会衆がおとなしく従ったためか、予想されたほどはこの命令によって起こったトラブルの数は多くはなかった。

（教義と儀式の多様性）

それどころかあちらこちらに、主教的権威の保護のもとに、周囲の世界とは奇妙な対照をなしている信仰と実践の小世界が存在した。アバディーンのカレッジは、ほかの聖職者の信条よりも寛容な信条を信奉していることで悪名高かった。ホリルードのキングス・チャペルや、セント・アンドリュースのカレッジの 1 つや、主教座聖堂のいくつかでは、イングランドの祈禱書が誰彼を不快がらせることもなく使われていた13)。もしもこのまま状況が進んでいくことが許されていたならば、スコットランド教会は、チリングワース14)やヘイルズ15)が理想としたところの包括的寛容が実現した最初の例となっていたことが、たとえ高い確率ではなかったにせよあっただろう。

12）原注：それはエアーで起こった。*Brereton's Travels*, Chetham Society, 121.（*HE8*, 306）

訳注：エアー（Ayr）はスコットランド南西海岸の町。(Wiki, Eng, 'Ayr')

13）原注：*Large Declaration*, 20.（*HE8*, 306）

14）ref: *HE8*, ch. 83, p. 259ff.

15）ref: *HE8*, ch. 83, p. 265ff.

（チャールズ、スコットランド教会に強制することに決める）

チャールズはいついかなる時でもそのような柔軟な信仰実践に同意しそうになかった。1633 年、ウィリアム・ロードが国王に供奉してスコットランドを訪れたとき、スコットランドの教会の多くが、その外観が貧しいことにショックを受けた。中には単なる四角い建物もあり、彼にいわせればまるで鳩小屋のようであった。内部の桟敷席は、芝居小屋の座席を思い出させた16)。ある時、彼が古いゴシック式の建物がそのような粗末な扱いを受けているのを見て、「宗教改革のときからそうなったのです」といわれたとき、「それは改革ではなくて改悪だ」ときっぱりといい切った17)18)。

（1635 年、ブリアトンのスコットランド人の習慣に対する指摘）

この外的な似つかわしさに対する無頓着は、間違いなく大部分カルヴァン主義の広がりに起因するものである。しかしそれは、単純に貧困に起因する外的な充足性に対する無頓着と切り離して考えることはできない。17 世紀のイングランドは、たしかに衛生に関して今日の我々よりもはるかに遅れていたことは事実である。しかし、1635 年にエディンバラを訪れたあるイングランド人旅行者は、もっともよい家でも汚れが溜まり放題にされていることに驚きの声を上げている。彼は手紙に書いている。「この町は空気がうまく、健康的で、間違いなく住むのにもっとも健康に適した場所です。ただし、その住民がきわめて汚い身なりをしており、怠惰でなければの話ですが。私は鼻をつままずして一度でも玄関を通り抜けることができたためしはありません。寝室、コップ、リネン、肉、すべてが汚い。綺麗だったものは一つもありません。」と。リネンは洗ってあったとしても、イングランドのよごれたリネンとほとんど同じであった。

16）原注：*Works*, iii. 365. （*HE8*, 306）
訳注：ed. by William Scot (Vol. 1-2), James Bliss (Vol. 3-7), *The Works of the Most Reverend Father in God, William Laud, D.D. sometime Lord Archbishop of Canterbury* (7 vols) , (Oxford ; John Henry Parker, 1847-1860)

17）原注：このスコットランドの教会のみすぼらしさに対する当てこすりは、よく無分別な著述家によって、あたかも「カトリック時代のほうがスコットランドは経済状態がよかった」というような意味で引用されている。（*HE8*, 306）

18）「古いゴシック式の建物」とはセント・ジャイルズ教会のことだろう。1580 年頃に内部が壁で分けられ、内陣（chancel）の部分が小教会になり、交差部（crossing）と身廊（nave）部分の残りが大教会になった。1633 年にチャールズは、新しくつくるエディンバラ主教区のために、セント・ジャイルズ教会を主教座聖堂にすることを決める。そして、内部の壁を取り去る工事が始まる。（ref: Wiki, Eng, ‘St Giles’ Cathedral’）

「台所に入って、彼らが肉の下ごしらえをしているのを見て、流し台をのぞく」と、「もうおなか一杯になり」、「もうあまり食欲がわいてこなかった」という。その旅行者のいうことはかなり信頼できる。なぜならば、彼はより高度な問題では、スコットランド人を非常にほめているからである。彼ははっきりと次のように述べている。「スコットランド人の圧倒的大部分は、非常に正直で宗教的に熱心です。私は酔っぱらったり、やたらと宣誓をしている者をほとんど見たことがありません19)。たとえ何か宣誓をしたとしても、もっとも通常よく聞かれる言葉は、『私の心にかけて』です。私をもてなしてくれた大部分の人々と、私が会話を交わしたその他の人々は、それはそれは健全で、正統派で、宗教的に熱心な人々ばかりでした。物事を要求するにおいては、彼らはイングランドの我々を超えるものではなく、しかし、当初の要求をずっと主張し続け、それにこだわり続けます」と20)。

19）ピューリタンは、宣誓はご法度だったらしい。旅行記の著者のウィリアム・ブリアトンはピューリタンで、後年、内乱において議会軍に加わる。

20）原注：*Brereton's Travels*, 102, 106, 110.（*HE8*, 307）

訳注：上掲書のフルタイトル等は以下の通り。William Brereton, ed. by Edward Hawkins, *Travels in Holland, the United Provinces, England, Scotland, and Ireland, 1634-1635*, 1844.　ウィリアム・ブリアトン（1604－1661）はのちに内乱で、議会軍の指揮官になる。（ref: John Morrill, *Sir William Brereton*, DNB）

（1634 年 5 月、国王の意向）

このような頑固なまでの熱意と正直さは、チャールズの賞賛の対象とはならなかった。彼の目はスコットランド人の生活の外観の殻を見抜くことはできなかった。王にとっては、(ロードにとってもそうであったように) 教会をそのような粗末な建物にし、儀式をそのような崇拝のないものにした改革は、改悪でしかなかった。牧師たちの唱える長い即興の祈りは王の気持ちを煩(わずら)わせた。それがその時以来、多くのイングランド人の気持ちを煩わせてきたように21)。こうしたことすべてに対して、王にはぴったりの処方箋があった。彼はイングランドに帰ると、すぐにスコットランドの主教たちに手紙を書いた。「私はスコットランド教会の利益と平和を慮(おもんぱか)り、そのためにそこにおいて良き、似つかわしい秩序と規律が守られるようにし、それによって、宗教と神への礼拝が促進されるように期し、また、当該教会においてもっとも欠落しているものといえば、何といっても共通祈禱書の存在、それから、当該教会の属しているすべての教会において守られるべき均一の礼拝であると考え、さらに、その均一性のための教会法の存在であると考えるので、当該教会を代表するあなた方に権限を与え、それによって、そこで使われるべき礼拝形式について賛同して頂き、その規律の均一性のための教会法を策定して頂きたいと願うものである」と22)。

（主教と教会法廷）

たしかに公式的には、主教は「当該教会を代表する」者と見られていたかも知れない。しかし彼らは、スコットランドの宗教的精神や宗教心をいかなる意味においても代表していなかった。いや、教会組織との関係においてさえ、彼らの地位はイングラン

21）原注：*Large Declaration*, 15. （*HE8*, 307）

22）原注：5 月 13 日付国王より主教宛て。Sprott's *Scottish Liturgies, Introd. xlviii.* キーブルがスコットランドを訪れたときの気持ちと比較せよ。「カークやカークが聖なる場所を汚し、侮辱している様(さま)は想像以上にひどいものである。(たとえばジェドバラ大修道院）私はいかに考えてもそのようなところでの礼拝には加わりたくない。彼らは一人残らず大声で、『祭壇をたたきつぶせ』と宣言している」 Coleridge, *Memoir of Keble*, 350. （*HE8*, 308）

訳注：参照されている書籍は以下の通り。John Taylor Coleridge, *A Memoir of Rev. John Keble* (Oxford, England; J. Parker, 1869) ジョン・キーブル（1792－1866）はイングランド教会の聖職者で、オックスフォード運動のリーダーの一人。(ref: Perry Butler, *Keble, John*, DNB)。「祭壇（altar)」という呼び名は、カトリック的であるとされた。よって、スコットランドの長老派信者が反発した。

ドの主教とは非常に異なっていた。イングランドでは、主教は教会法廷を意のままにした。そして、教区委員はイングランドのピューリタンがきわめて不満を述べているように、教会の法に違反した者を教区民とはまったく独立した組織の前に引き出すことを宣誓によって誓わされていた。スコットランドでは、主教的管轄権はそこまで深く根を張っているわけではなかった。教会に関わる全般的マネージメントに関しては、主教は聖職者会議に代わったが、教区に関わる限局的なマネージメントは、いまだに教区民から選ばれた者の手にしっかりと握られていた。すなわち、助祭は教区民から選ばれ、貧民に食糧を施すことを担当していた。また、長老も同じく教区民から選ばれ、会衆のメンバーによって犯された道徳的過ちについて目配りした。助祭と長老は毎週会議を開き、教区の事柄に関して牧師と相談した。不道徳な行為は、イングランドと同じように会衆の面前で「悔悛の椅子」に座らせられ、さらし者にされて罰せられた。礼拝が行われている最中に町でぶらついていたり、酒を飲んだり、ゲームに打ち興じていた者は監獄に送られた23)。

（中間層の政治教育）

かくしてスコットランドの中間層は政治的な教育を受けた。人々は教会法廷において共に行動することをおぼえた。そこでは、彼らが一院制の議会においてそうであるように、大貴族や高位聖職者によって影を薄められるということがなかった。たしかにそれは、人格の多様性を育むような教育ではなかった。すべての議論において、道徳上、宗教上確立された原則が当然のこととされた。しかし、たとえそうしたシステムが思想のリーダーを育まないものであったとしても、それは人と人とを分かちがたい絆で結びつけたのである。

23）原注：*Brereton's Travels*, 106.（*HE8*, 308）

（主教制に対する高まる反発）

そのような法廷は必然的に主教と対立した。その主教たるや、年々ロードの手下であることがはっきりとしつつあった。パトリック・フォーブス24)のようなタイプの主教が死ぬと、ロードの意にかなった者たちがその跡を継いだ。すなわち、ウェダバーンやシッサーフ25)である。しかし、その彼らですらロードによる促しがなければ、庶民感情との空しい戦いに入ろうとはしなかったであろう。

（ロードとスコットランドの主教たち）

ロードは「教会たるもの典雅なところであるべし」のあまりにも強い唱道者だったので、かえってカンタベリー大主教としてスコットランド教会に干渉することはできなかった。しかし、もし国王が彼から個人としてのアドバイスを求める場合、断る理由はなかった。また、もし国王から頼まれれば、国王の指示をスコットランドの主教たちに伝えてはいけない理由もなかった。そこで彼は、あたかも国王の秘書官であるかのように指示を主教たちに伝え、自分の秩序感覚を揺るがした出来事について彼らに抗議し、熱心な者に対しては昇進の機会もあると述べた。すると、スコットランドの主教たちは当然のごとく腹を立てた。彼らはわざわざ秘書と大主教を区別したりはしなかった。単に、「カンタベリー教皇はローマ教皇と同じくらい始末が悪い」と述べたのみだった。

---

24) Patrick Forbes (1564-1635)　アバディーン主教。（在職 1618-1635）（ref: David George Mullan, *Forbes, Patrick, of Corse*, DNB）

25) Thomas Sydserff (1581-1663)　ガーディナーは“Sydserf”と綴っている。（ref: Sharon Adams, *Sydserff, Thomas*, DNB）

⑵新祈禱書が作られる

（1635 年、教会法と祈禱書）

一方、スコットランド教会を苦しめていると考えられる原因に対して治療薬を当てる準備が、ロンドンにおいて精力的に進められた。新しい教会法の草案が国王によってロードとジャクソンに、そして、新しい祈禱書の草案がロードとレンに提出された。その修正案が出され、それはスコットランドの主教の同意を得るべく現地に転送された。しかし、その修正案を思いついた頭脳は、落ち着きのないカンタベリー大主教のそれであった。

（1636 年、教会法の発布）

1635 年に認可された教会法は、翌年発布された。そこに見られるのは、主教と教区法廷とのギャップを橋渡ししようとする試みである。主教管区の宗教会議と全国宗教会議があるべきとされた。そのような宗教会議は、それが公正に構成され公正に取り扱われていれば、既存の宗教体制を維持するのに大いに貢献していたであろう。しかし、この教会法の発布の仕方そのものは、チャールズが教会法を策定するにあたって聖職者にも平信徒にも全然相談するつもりがないということを示す何よりの証左となった。当該教会法は、国王の権威のみによって世に出された。次の世代の高教会派の者ですら、この教会に対してなされた侮蔑に対して首を振った。主教のうち二、三人が個人的に相談を受けただけであった26)。

かくして世に送り出された教会法には良いアドバイスも含まれていた。牧師たちは長くて退屈な説教を控えるように指示されていた。また、教義の正統性を守る義務ばかりでなく、正しく生きていくことの義務も教えるように指示されていた。しかしその一方で、スコットランド人の気持ちを少しでも尊重する気持ちがある者ならば、書けないような命令もあった。たとえば、聖餐卓は「内陣のもしくは教会の上端に」置かれるべしとされていた。また、「サクラメントとしての告白と赦免は」ある場においては誤用されてきたが、自らの良心に負担を感じる者は、「主教や長老に自らの罪を告白する」ことが奨励されるとされていた。また、聖職者の仕事のすべての面において、牧師は主教に厳格に従うべしとされていた。そして、主教の上には国王がお

26）原注：Burton, *Hist. of Scotland*, vi. 397.　（*HE8*, 310）

訳注：John Hill Burton (1809-1881), *History of Scotland from Agricola's Invasion to the Revolution of 1688*, vol. vi (William Blackwood and Sons ; Edinburgh, 1870)

り、その権威はすべての教会訴訟において、「敬虔な王たちがユダヤ人に対して行ったように、あるいは、キリスト教徒となったローマ皇帝が原始教会に対して行ったように」行使されなければならないとされていた。祈禱書は（当時はまだ刊行されていなかったが)、すでに教会の法の保護のもとに置かれていた。その祈禱書には「聖書に反する」ことが書いてあるとか、それは「腐敗している、迷信的である、不法である」などと主張することは、破門されることを意味した27)。

27）原注：Canons, *Laud's Works*, v. 583. （vol. viii. 310）

（新祈禱書、カトリック的であるとされて嫌われる）

教会法と同様、祈禱書もいかなる教会組織にも提出されなかった28)。また、事前に相談を受けたごく少数の主教のうち、誰一人としてスコットランド国民の気質を知る者はいなかった。相談を受けた主教のうちの一人、ダンブレイン主教のウェダバーン29)は、これまでの人生の多くをイングランドで過ごしてきた。彼は聖餐式のときに読まれる文章から、エドワード 6 世の第 2 祈禱書に起源をもつ部分の削除を強く主張した30)。その部分は彼がいうには、ツヴィングリの教義、すなわち、『サクラメント31)は象徴でしかなく、キリストの受難を記念して食されるものである』の匂いがするように思われた32)。この主張は、単なる理由付けとしてはそれで十分だったかも知れない。ウェダバーンが残すように提案したエドワード 6 世の第 1 祈禱書からの部分は、「霊的な意味においてであるがキリストは現在する」というカルヴァンの教義に容易に適合した33)。ウェダバーンに欠けていたものは、想像力ある眼力であ

28）原注：この祈禱書の初期の沿革に関しては 7 巻 282 頁を見よ。(HE8, 310)

29) James Wedderburn (1585-1639)　ダンブレイン主教。(A. S. Wayne Pearce, Wedderburn, James, DNB)

30）つまり、1559 年の祈禱書の “The bodie of our lord Jesu Christ which was geven for thee, preserve thy body and soule into everlastinge life, *and take and eate this, in remebraunce that Christ died for thee, and feede on him in thine heart by faith with thankesgevynge*.” からイタリック体の部分を取り除くということ。(*BCP*, p. 137 ; ゴンサレス下, p. 83, 80.)

31）サクラメント：この場合はおそらく、聖餐式のときに使う「パン」のこと。(ref: OED, ‘sacrament’, 2. b. ; 組織神学事典, p. 218 ; よろこび, p. 331)

32) ref: ゴンサレス下, p. 83.

33）聖餐式のパンとぶどう酒におけるキリストの臨在に関しての各種の考え方について整理してみると、以下のようになる。

1. カトリック：パンとぶどう酒は祈りとキリストの言葉によって、キリストの体と血に実体的に変化する。(実体変化説)
2. ルター：実体変化説を否定しつつも、キリストがパンとぶどう酒のもとに現臨するとした。(共在説)
3. ツヴィングリ：パンとぶどう酒はキリストを象徴するしるしに過ぎず、このしるしによってイエスの死を記念するのだとした。(象徴説)
4. カルヴァン：パンとぶどう酒そのものは象徴であるとしつつ、聖霊の働きによって高められて、キリストの現臨に接し、キリストに与るとした。

エドワード 6 世の第 1 祈禱書由来の部分（注 29 の引用の前半部分）は、実体変化説

った。それこそが主教の図書室を飛び越えて田舎の聖職者の牧師館に至るまでを見通すことができるようにするものであった。また、不要な変化は必ず疑念を巻き起こすということを悟る能力を欠いていた34)。この不運な典礼35)の執筆者たちがローマ定式書36)に近づこうとしていたと論ずることほど不適切なことはない。しかし、もしも彼らがミサ典書37)を直ちに導入していたら、それ以上民衆を怒らすことはなかったであろう。もしもノックスの『共通式次第書』（*Book of Common Order*）の中にある古い形式の祈禱文が廃止されれば、当然、当惑した民衆は（彼らは事前に意見を聞かれることすらなかったのだ）、この変化の裏にはどのような目的が隠されているのだと自問自答したであろう。

をとっているようにも見え、一方で、それはカルヴァン主義とも結びつくと考えられる。なぜならば、カルヴァン主義の場合も結局、聖霊によってキリストの臨在が起きるとされているからである。つまり、アルミニスト（ウェダーバーン）がスコットランド長老主義の見解とも帳尻を合わせようとしたか。(ref: 組織神学事典,「聖餐」の項, とくに p. 218；ゴンザレス下, p. 83)

34）原注：Laud's Works, iii. 357.　しかしながら、ウェダバーンが最初にその提案を行ったのではない。それは現在、大英博物館に収蔵されている祈禱書に対する（おそらく1628 年に作成された）手稿による訂正の中で依拠されている。*Egerton, MSS. 2417.*（HE8, 311）

35）典礼：原文 "liturgy"。本来、教会における挙行を意図した、形式化され、成文化された礼拝の全体。(『典礼と音楽』教会用語集, p. 36 ）

36）ローマ定式書：原文は "the Roman ritual" であるが、おそらく"Rituale" のことであろう。"Rituale" とは、「ローマ定式書」のことで、「ローマ定式書」とは、中世の諸式書に代わって、トリエント公会議（1545－1563）後にできた定式書のことである。洗礼、堅信、婚姻など小教区内で行われる典礼を収めている。(『典礼と音楽』, 教会用語集, p. 36)

37）ミサ典書：原文 "missal"。ミサにおける司祭の式文を収めた本。のちにミサ典書は、しばしば音楽を含め、ミサの善式文を吹く妙になった。(曲譜付きミサ典書)（『典礼と音楽』, 教会用語集, p. 43）

（新祈禱書、イングランド的であるとして嫌われる）

他の修正もそれ自体は小さなものであったが、それでも、聖餐式における強度にプロテスタント的な表現の除去と同じ方向性を指していた38)。もう一つ欠陥があって、それも同じくらい致命的なものであった。すなわちそれは、祈禱書がカトリック的であろうとなかろうと、それは間違いなくイングランド的であったということである。そこには繰り返しイングランド人の手が入れられていた。そうであることを知ることは、それをスコットランドでは鼻つまみものにするのに十分であった。たとえロードから贈られた贈り物が計り知れないほどの価値のあるものであったとしても、それはふんと蔑んでわきに追いやられていたであろう。

（穏健派）

そのような状況の中では、聖職者と会衆が一つにまとまることは間違いなかった。しかし一方で、主教とも狂信者とも距離を保ちながら、自らの周辺にある教会統治のスキームに自分たちを適合させていくことに最善を尽くしていた者たちも、（キルウィニングのロバート・ベイリー39）のように）ごく少数ではあるが間違いなくあちらこちらにいた。チャールズは、正確にいえばこのような者たちを疎外しようとして自分にできるあらゆることを行っていたのである。それでも、チャールズもロードも新祈禱書が深刻な反発にあうとはまったく考えていなかったと信じる理由は十分にある。これまで時々、チャールズは専制愛によって、あるいは、宗教愛によってそのようなことをするように駆り立てられていったのではないかと問われてきた。しかし、これらのうちのどれでもないことは、チャールズの人格について深い知識がなくてもわかる。彼は自分の行っていることを、人類に対するまったくの無知と合わさった秩序愛から行っていたのである。彼は祈禱書の中に、美しく整った配列と選び抜かれた適切な表現以外の何も見出すことはできなかったのである40)。

38）つまり、カトリック的であるということ。

39) Robert Baillie (1602-1662)　スコットランド教会の牧師。彼は 1631 年にエアシャーのキルウィニング（Kilwinning）の牧師になる。(ref: David Stevenson, *Baillie, Robert*, DNB)

40）原注：祈禱書の中でスコットランド人を怒らせた部分の 1 つは、聖別のときの牧師の位置に関する指示である。Burton, *Hist. of Scotland*, vi. 424 を見よ。ランベス本（そこにはロードの注が記してある）は、東方向に位置することを直接指示している点で、スコットランド本と異なっている。おそらく、筆跡はロードによるものであるが、提案はレンによるものであろう。（*HE8*, p. 312）

訳注：424 頁より 426 頁を見たほうがわかりやすいだろう。また以下の本が参考になる。Gordon Donaldson, *The Making of the Scottish Prayer Book of 1637* (Edinburgh at the University Press, 1954)

⑶新祈禱書の使用が命じられる

（10 月 18 日、祈禱書が使われるようにとの命令が下される）

最後までロードは、祈禱書を受け入れられやすいものにするというよりも、その言語を洗練することに重きを置いた。それは繰り返し印刷され、しまいには印刷技術的には完璧なもののように見えるようになった。1636 年 10 月、チャールズは枢密会議に書簡をしたため、その中で「聖職者のアドバイスを受け入れ、本祈禱書が公的礼拝の場で使われることを至当と考える」と知らせた。

（12 月）

12 月、宣明（せんめい）が出され、すべての教区でその祈禱書が採用され、次の復活祭が来るまでにその複製を 2 部入手するようにと命じられた41)。

（1637 年、スコットランドに届くのが遅れる）

復活祭が来た。しかし、祈禱書はまだ用意できていなかった。一方、噂が出回っていた。「その祈禱書はイングランドではすでに出回っている」とか、「それはイングランドの祈禱書とは異なっており、よりカトリック的な儀式が付け加わっている」などといったものであった。また、こうもささやかれた。「あれは偽装されたカトリック式ミサに過ぎない」と。時間が経つにつれて、その差し迫った脅威はぼんやりとしたまま恐ろしいものになっていった。それでも注目に値することは、これまでのところそれに抵抗しようという考えはまだ生まれていなかったことである。過激なピューリタンがあえて志向したことの最大は、自分たちをノン・コンフォーミストの団体として認めてもらって、政府の黙認のもと公の場とは離れたところで礼拝を行うことを許可してもらうことであった42)。

（祈禱書、ついにスコットランドに来る）

41）原注：国王より枢密会議宛て 10 月 18 日付書簡（*Balfour*, ii. 224）　*The Preface to the Prayer Book*.　（*HE8*, 312）

42）原注：*Baillie*, i. 4.　（*HE8*, 313）

訳注：Robert Baillie (1602-1662), ed. by David Laing (1793-1878), *The Letters and Journals of Robert Baillie* (3 vols) (Edinburgh ; R. Ogle, 1841-2)

1637 年春、この長らく恐れられていた祈禱書がついにスコットランドに来た。5 月になると牧師たちは皆、その祈禱書を 2 部購入するように命令を受けた。従わなければ、法外追放であった。主教たちは、祈禱書の準備については自分たちの宗教会議（シノッド）に相談することは全然なかったが、今や会議を召集し、牧師たちにおとなしく従うように促した。表立って反抗の声は聞かれなかった。個々の牧師が確実に自分に破滅が待っているようなことをするのは無理であった。しかし、プライベートな場では皆もっと自由に自分の気持ちを語り合った。その祈禱書はイングランドのものよりもカトリック的だとささやかれた。その祈禱書には聖職者総会の権威づけもなければ議会の権威づけもないと。スコットランドのピューリタンの感情および国民感情は日に日に高まっていった。

（貴族たちの気持ち）

このようにして起こされた感情がリーダーシップ不在のために萎えていくということはほとんどありえなかった。当時のスコットランド貴族は、一人か二人のきわめてすぐれた例外を除いてはそれほど能力的に優れていたわけではなかったが、それでも彼らには、自分たちが権力をもっていて当然という意識があった。それはイングランド貴族からは長らく失われていたものであった。スコットランド貴族たちは、自分たちの頭上に主教を置くシステムの存続に我慢ならなかったのである。ロシスやラウダウンのような者たちの熱意をまったくの偽善だということは簡単なことである43)。しかし、それよりもはるかにありうることは、彼らは強く感じることが自分たちの利益になる場合に強く感じるのである44)。年配者は、かつて長老制の頸（くびき）は主教制の軛と同じくらい重たかったことをおぼえていた。しかし他の者たちは、たとえ中年世代の者であっても、長老主義に関しては噂を通して以外は何も知らなかった。彼らは、主教が自分たちを押しのけて国王の愛顧をものにし、自分たちの地所においてさえも、自分たちを以前よりも取るに足らない存在にしてしまったことを目の当たりにした。彼らの中にあるいかなる宗教的感情も、いにしえのカルヴァン派教義を通して育まれたものであった。そして、自分たちにもスコットランドの国民的栄誉が欲しいという感情が、彼らの小作人や従者たちと同様、彼らの中にも熱く燃えたぎっていたのである。

43）つまり、彼らは、本当は信仰心などたいしてないのに、敬虔なふりをして長老主義を支持し、主教制に抵抗しようとしているから偽善者だと非難することは簡単だ。

44）長老制に情熱を抱くことが自分たちの利益になる場合は長老制に情熱を感じる。

⑷エディンバラの第 1 騒擾

（「エディンバラ会合」と称されているものについて）

「不平貴族の一部が聖職者の指導者とごく少数の『より敬虔な性別の者』とともに参加したミーティングが、抵抗を組織する目的でエディンバラで開かれた」という話にどれほどの真実があるのかは、確信をもっていうことはできない45)。しかし、試練にさらされた宗教形式に対する愛着は、いつでも男性においてよりも女性において強いものである。おそらく、エディンバラの婦人たちの中に町の魚売りの女や召使い女の怒りを掻き立てた者がいたのだろう。しかし、彼女たちが、彼女たちが導いた精神をつくり出したのだと想像するなら、これほど大きな間違いはないだろう。スコットランド国民やスコットランド教会に対する侮辱が、身分の低い者にも高貴な者にも一様に怒りの炎を灯したのである。

（7 月 23 日、新祈禱書の朗読）

ついに 7 月 23 日がエディンバラ市民の忍耐を試す日として定められた。首都の屈服が国の残りの部分にもよい影響を与えるだろうと考えられてのことであった。しかし、主教たちによって感じられていた自信は、突然の激しいショックを受けることになる。セント・ジャイルズ教会（そこは当時、新設のエディンバラ主教区の主教座聖堂（Cathedral Church）に昇格したばかりであった）に、たくさんの召使い女が集められた。彼女たちは自分たちの「奥方様」のための席をとっていた。「奥方様」たちは当時、祈禱の時間が終わり、説教師が登壇する準備が整うまでは家にいるのが習慣であった。

（セント・ジャイルズ教会における騒擾（そうじょう）46））

45）原注：この話はガスリー回顧録の 23 頁（Guthry's *Memoirs*, 23）に載っている。それは王政復古ののちに書かれたもので、その詳細部分に関しては間違いなく不正確である。（*HE8*, 314）

訳注：*Memoirs of Henry Guthry, Late Bishop of Dunkel [sic], in Scotland : wherein the conspiracies and rebellion against King Charles I. of blessed memory, to the time of the murther of that monarch, are briefly and faithfully related.*（London : printed for W. B. and sold by J. Nutt, near Stationers-Hall. 1702）

46）すなわち、1637 年 7 月 23 日におけるセント・ジャイルズ教会日曜礼拝事件である。新祈禱書に対する実際の抵抗が庶民（とくに女性たち）によって初めて示された日

首席司祭が祈禱書を開いて、朗読を始めた。すると、女たちから不賛成の声が湧き起こり、その声をかき消した。ある女が、「ミサが我々の中に入ってきた！」と叫んだ。すると、もう一人別の女が、「バール神47)が教会の中にいる！」と叫んだ。次々と侮辱的な言葉がその司祭に投げつけられた。エディンバラ主教のリンジー48)が朗読台の頭上の説教壇に上がり、騒ぎを静めようとした。彼は、騒ぎ立てる宗教的熱心者たちに向かって聖なる場所を冒瀆するのはやめるように求めた。この言葉には、ピューリタンの心にとってまったく忌まわしい考えが込められていた49)。騒ぎはその迂闊な勧告によってますます大きくなっていった。女の一人が主教めがけて投げつけた座椅子が、首席司祭の頭をあともう少しのところでかすめた。この最後の侮辱行為に際して、スポティスウッド大主教50)は教会から騒擾(そうじょう)者を排除してもらうため治安判事を呼んだ。この騒々しいプロテスタントの擁護者はやっとの思いで教会から出され、彼らの面前で教会の扉に閂(かんぬき)が差し込まれた。それでも彼らは、外から大声で扉を叩き、窓には石がぶつけられた。窓ガラスが割れる音が響く中、礼拝は最後まで続けられた。一人の女性が（彼女は教会の後ろのほうに誰にも気づかれずに残っていた）偶像崇拝的な礼拝にけがされないようにするために両手でしっかりと耳を塞ぎ、黙々と聖書を読んでいた。すると、突如として後ろから、若い男が大声で「アーメン」といったのが聞こえたので、はっと我に返った。そして、その男に聖書を投げつけると、こう叫んだ。「このうすのろ！　私の耳元以外にこの場所でカトリック式ミサを唱える場所はないのか！」と。やがて教会の扉が開かれ、わずかな会衆が出て行こうとすると、外で待っていた群衆が一挙に入ってきて激しく主教に詰め寄った。ウィームズ伯の介入がなければ、主教は生きて教会から出てくることなどほとんどままならなかったであろう。

である。

47）バール神：聖書においては邪神として扱われている。

48) David Lindsay (c.1575-1639/40)　ブレチン主教（1619－1634），エディンバラ主教（1634－1638）（ref: David Stevenson, *Lindsay, David*, DNB）

49）つまり、「聖なる場所の冒瀆」という言葉がピューリタンを刺激したか。神聖冒瀆といわれるのは心外である。（ref: *Large Declaration*, p. 23.　*Large Declaration* については後掲注 51 訳注①を参照のこと）

50）スポティスウッド大主教：セント・アンドリュース大主教ジョン・スポティスウッドのこと。John Spottiswoode (1565-1639) (A. S. Wayne Pearce, *Spottiswoode, John*, DNB)

（午後の礼拝）

急いで集められる枢密会議員が集められ、治安判事に、午後の礼拝を守るように即座に命令が下された。守備隊が教会まで行進し、選ばれたごく少数の者だけが教会内に入ることを許された。さらに特別の指示が出され、いかなる女性も扉を通してはならないとされた。ロックスバラ伯が、投石が雨あられと降る中、彼の馬車に主教を乗せて、家まで送り届けた。彼の歩兵は暴民を寄せつけないようにするために、抜剣を余儀なくされた51)。

51）後世の物語はさておき、我々が依拠するのは２つの同時代における説明である。すなわち、１つは国王の『大宣言』（訳注①）の中に書かれているもの。もう１つは、ロシスの *Proceedings*（訳注②）に付けられた付録（Appendix）にあるもので、激しいピューリタン精神で書かれたものである。どちらも全体的に非常によく符合している。どちらも椅子が１つだけ投げられたことで一致している。ところで、ジェニー・ゲディス（Jeanie Geddes）をその日のヒロインとして名指しする伝統は、かなり前に廃れている。バートンの *History of Scotland*, vi. 443（訳注③）を見よ。事件よりもずっとあとになってウッドローは、「ずっと信じられてきた言い伝えでは、最初に椅子を投げつけたのはジョン・ミーン（John Mean）というエディンバラの商人（すなわち商店主）の妻ミーン夫人である」と述べている。（訳注④）ウッドローは、多くの椅子が投げつけられ、「喧嘩を行った若者の多くは変装した年季奉公人であった」と考えている。なぜならば、「彼らは椅子をかなり遠くへ投げ飛ばしているから」である。そうだとすると、年季奉公人は主教の頭めがけてよく狙いを定めることなどとてもできなかったにちがいない。ゴードンの説明はいくつかの点を付け加えた上での『大宣言』の写しに過ぎない。（訳注⑤）（*HE8*, 316）

訳注：

① 『大宣言』とは以下の通り。Walter Balcanquhall, *A Large Declaration concerning the late tumults in Scotland*, (London, 1639). （『スコットランドにおける近時の騒動に関わる大いなる宣言』）ロチェスターの首席司祭ウォルター・バルカンコール（c.1586-1645）は、国王よりスコットランド危機に関する記録を書くように依頼され、1639 年に国王の名において当該書籍が出版された。（John Coffey, *Balcanquall, Walter*, DNB）

② ロシスの *Proceedings* とは以下の通り。John Leslie, earl of Rothes (c.1600-1641), *A relation of proceedings concerning the affairs of the Kirk of Scotland, from August 1637 to July 1638*, (Edinburgh, 1830). （『1637 年 8 月から 1638 年 7 月にかけてのスコットランド教会の事件に関わる出来事についての話』）同書の 197 頁以下を見よ。

③ バートンの *History of Scotland*, vi.に関しては本章注 26 訳注を見よ。

④ ウッドローの書籍は以下の通り。Robert Wodrow, ed. Matthew Leishman, *Analecta: or, Materials for a history of remarkable providences; mostly relating to*

（7 月 24 日、枢密会議）

翌日、枢密会議が開かれた。その俗人メンバーが主教に対するいかなる類いの抵抗に対しても心より共感していたことはまず疑いのないことである。

Scotch ministers and Christians (4 vols), (Edinburgh, 1842-3). （『アナレクタ、すなわち驚くべき数々の神意の歴史のための資料集：おもにスコットランドの牧師とキリスト教に関する』）ロバート・ウッドロー（1679-1734）はスコットランドの牧師、歴史家。彼の手稿がのちに出版された。(L. A. Yeoman, *Wodrow, Robert*, DNB） ガーディナーが言及している箇所は第 1 巻の 64 頁。

⑤ ゴードンの書籍とは次の通り。James Gordon, ed. J. Robertson and G. Grub, *History of Scots Affairs, from 1637 to 1641* (3 vols), (Aberdeen, 1841). その第 1 巻 7 頁以下を見よ。なお、ジェームス・ゴードン（1615?－1686）はバンフシャー、ロシメイの牧師、地理学者。(ref: Wikisource, 'Dictionary of National Biography, 1885-1900/Gordon, James (1615?-1686)')

なお、言い伝えではジェニー・ゲディスという女性が最初に新祈禱書に対する抗議の意味で、これを朗読する首席司祭めがけて腰掛を投げつけて、これを皮切りとして会衆による猛然とした抗議が始まったとされていたらしい。さらには三王国を巻き込んだ大内乱に発展したという意味で、そのすべての発端の女として英雄視されていたらしい。ところが、そのような言い伝えは 19 世紀後半にはすでに否定されていたようである。（ガーディナーもこれに与している。）実際にはジェニー・ゲディスという女性は存在しておらず、ただこの時、猛然と抗議した女性たちを象徴するキャラクターとしてそのような人物が作られたというのが真実らしい。(ref: David Stevenson, *Geddes, Jenny*, DNB）それでも、このような伝説は相変わらず今日においてもまだ伝わっているようである。

（サー・トーマス・ホープとロード・ローン）

法務長官のサー・トーマス・ホープはこの騒動を扇動した一人だといわれている。一方、カトリック教徒であるアーガイル伯の跡取り息子、狡猾な頭脳の持ち主、きわめて慎重な人物であったロード・ローンはそこまではやっていないだろうが、それでも当時広く流布していた感情を共有していた。つい最近も、従者の一人に対して高等宗務裁判所によって課された罰金と禁固刑に関して、ギャロウェイ主教と激しくやり合ったばかりであった52)。

（トラケアー）

しかし今のところは、主導権は財務長官のトラケアー伯53)の手にあった。のちにトラケアーは二枚舌を使ったといって責められる。しかし、よりありえることは、彼はどちらの側54)にも共感できなかったのだ。彼は冷静で用心深い実務家であり、統治の詳細に通じていたが、狂信主義と狂信主義がまさにぶつかり合おうとしているその時に、両者を仲介しようとしてその試みの犠牲になってしまったのだ。彼は、主教たちが自分たちの考えを消極的な教会に押しつけようとしているときは、彼らに反発した。それはとくに、彼らの一人、マックスウェル主教が彼のスコットランド財務長官としての地位を奪おうと陰謀を企てていると信じるだけの理由があったのでそうであった。しかし、トラケアーはその本能と地位から、暴民が支配権を握ることは嫌った。とくにその背後に聖職者の支持があるときはそうであった。彼のような男は、チャールズの耳に常識的な言葉を届かすことができた。しかし、それがチャールズの心にまで達することはまずあり得ないことであったが。

（当局の行った措置）

枢密会議は、少なくとも表向きは国王の要望を実行するために即座に処置をとった。騒動を起こした者のうち 6、7 人が逮捕された。エディンバラの牧師たちは危険

52）原注：*Baillie*, i. 16. （*HE8*, 316）

53) John Stewart, 1st Earl of Traquair (c. 1599-1659)　1633 年、初代トラケアー伯に叙せられる。1636 年から 1641 年までスコットランドの財務長官。(J. R. M. Sizer, *Stewart, John, first earl of Traquair*, DNB)

54）どちらの側：すなわち、主教グループと反主教グループ（貴族と長老派）

にさらされることなく祈禱書を朗読できることを保証された。また、治安判事たちがそれを守るように命じられた。言葉だけ見れば、枢密会議はその義務を果たしているように見えた。しかし、言葉だけでは十分ではないだろう。牧師たちの中には祈禱書を朗読したがらない者もいた。また、朗読する気がある者も、暴民によってそれがビリビリに引き裂かれるリスクを冒したくなかった。彼らは、治安判事たちの秩序を維持する能力を信頼することはできないと表明した。おそらく枢密会議員の大部分も同じ意見であっただろう。スポティスウッドの動議で、国王の意向がわかるまでは、エディンバラでは新旧両方の祈禱文の使用が一時中止されることとなった。ただし、説教はいつもの通り行われることとなった55)。

（国王の不満足）

国王はそのような臆病に満足しそうもなかった。スコットランドにおいて彼を代表する者たちの苦労について、彼は何もわかっていなかった。彼は厳しい抑圧措置がとられるように命じた。しかし、彼はエディンバラ政府にそのような命令を実行するのに十分な力があるのかを問うのを忘れていた。治安判事たちはやれといわれたことをやろうとしたとき、すぐに騒擾者の裏にはエディンバラ中の者が味方についていることを悟った。枢密会議は治安判事たちに緩いサポートしか与えなかった。枢密会議の俗人メンバーは主教のことを責めた。すると、主教はそれをそっくりそのまま彼らに返した。

55）原注：*Baillie*, i. 18, 447.　Grodon, *Hist. of Scots Affairs*, i. 12.　（*HE8*, 317）

（8 月 7 日、事件に対するロードの見解）

ロードは国王の命により書簡をしたため、責任を双方に平等に分配した。彼は、「秘密の陰謀者の一団が無統制な暴民をけしかけて新祈禱書に反発させているから、新祈禱書を放棄すべきだ」という考えを一蹴した。曰く、「その祈禱書が自分たちのものであることを否定することは、主教にふさわしくない行為だ。新祈禱書はあなた方の労作である。それを支持することはあなた方の義務だ」と。また、こうも付け加えた。「自分たちが与えたミルクを捨ててしまうのか。ごく少数の乳しぼり女に怒鳴られたからといって。もっと賢明になってくれることを望む」と56)。

（8 月 19 日、国王の命令を執行するのに失敗する）

ランベスの安全な執務室で以上のように書くのは楽だったが、エディンバラで命令を実行することは難しかった。治安判事たちは、「誰もいかなる条件のもとでも祈禱書の朗読を行おうとしない」と率直に述べている。彼らは、朗読を行う者に対しては多額の金を進呈することにしたが、誰もそのような金を受け取るほど大胆ではなかった57)。

（8 月 23 日、ヘンダーソンの請願）

セント・ジャイルズのかしましい女たちは、エディンバラの住民の支持を受けていた。もしもエディンバラの背後にはスコットランドがついているならば、チャールズにはやらなければならない仕事がたくさんあるだろう。「新祈禱書を 2 部購入することを拒絶した者は法外追放に処する」という牧師たちに対する脅しは、田舎の牧師たちの気持ちを試金石にかけた。そして、正式な法形式にのっとった請願書が次々と枢密会議に届き始めた。今日、我々の手元に残っている唯一のものは、ルーカースの牧師アレグザンダー・ヘンダーソン58)によって書かれたものである。そこで使われている言葉は、論争を情熱の域から議論の域へと移した。彼は、偉大なる大義にふさわしい戦士として戦いの場に下りてきたのである。しかし、彼は主教たちのやり方に不

56）原注：Laud to Traquair, Aug. 7, *Works*, vi. 493. （*HE8*, 317）

57）原注：治安判事よりロード宛 8 月 19 日付，*Large Declaration*, 28. （*HE8*, 317）

58) Alexander Henderson (c.1583-1646)　スコットランド教会の牧師、政治家。ルーカース（Leuchars）はファイフ州北東沿岸近くの地。(ref: John Coffey, *Henderson, Alexander*, DNB)

満を述べようとして、いらいらして出てきたのではない。また、聖餐式のときに跪(ひざまず)く慣わしが完全に悪だと断じようと急(せ)いていたのでもない。今や、かつてのスコットランド信条59)を（彼のように）信じているすべて高潔な人士にとって、自らの教会と国民のために声を上げるべき時が来たのである。ヘンダーソンは、その抗議が真面目で穏健だからといって、最後には尻込みしてしまうということはないであろう。たしかに、彼は多くの者と異なり、新祈禱書がカトリック的だなどとはいっていない。しかし、彼はそれが「スコットランド教会」の「形式、礼拝、改革からかけ離れた」事柄を含んでおり、「重要な点においてローマ・カトリック教会に近づいている」と主張する用意があることをはっきりと述べていた。しかし、彼がおもに強調したい点はそこにあるのではない。彼は、従来の礼拝形式は聖職者会議と議会によって認められたものだといっている。しかるに、新しい礼拝形式はそのどちらによってもまだ認められていないのだと。またさらに、スコットランド教会は自由で独立した教会である。その牧師たちは、何が自分たちの会衆にあっているかをもっともよくわかっている。そして、その会衆は、「牧師たちが試されるときは、その変化に対して消極的になるだろう」と60)。

（ヘンダーソンの抗議の意味）

この冷静な物言いの中に、ヘンダーソンはスコットランド人民のための反抗の旗を立てた。彼は主教制に対して長老主義の大義を主張したのではない。ただ、「人民の宗教はその人民の後見のもとにある」といっただけなのである。

59）かつてのスコットランド信条：すなわち、1560 年にジョン・フォックスらによって起草され、当時のスコットランド議会によって承認された信仰告白。

60）原注：Supplication, *Baillie*, i. 449.（*HE8*, 318）

（チャールズ、引き下がることができず）

チャールズは大いに苦境に陥った。スコットランドにおける彼の権威だけが問題になっているのであれば、屈辱的なことではあるが、間違いを率直に認めることがもっとも賢明な策であったことは間違いがないだろう。しかし、彼の権威が受けたショックをスコットランドの地だけにとどめることはできなかった。スコットランドで真実であることはイングランドにおいても真実であった。ロードによって作られた人工的な教会は、ツィード川の向こう側に建てられた砂上の楼閣に加えられた打撃を自らに加えられた打撃として感じるであろう。また、チャールズにエディンバラにおける騒擾は、純粋に人民の怒りの結果であることをわからせることも容易なことではなかった。チャールズはその中に怒れる貴族の隠された手しか見なかった。その手は、自分たちよりも上の者たちに当然のごとく与えられた教会領や高い地位をつかみ取ろうとしていた。

（8 月 23 日、枢密会議、王を支持せず）

チャールズはどうしたらスコットランド人を従わせることができるだろうか。彼には軍事力がなかった。スコットランドの枢密会議は、たとえ支持したとしても中途半端な支持しか王に与えそうになかった。新祈禱書は 5 つか 6 つの場所で読まれただけだった。ヘンダーソンが枢密会議に出頭したとき、彼はたくさんのジェントルマンに伴われていた。遠隔の地から次々と送られてくる書簡は、彼を支持する感情が単に首都の近郊にとどまらないことを如実に示していた。たとえ枢密会議が厳格な措置をとることに積極的であったとしても、反抗を押さえるためにどうすることもできなかったであろう。ヘンダーソンは、新祈禱書を読めと命じたのではなく買えと命じたのだといわれた。

（8 月 25 日、枢密会議の王への書簡）

枢密会議は王に向けて書簡をしたためた。「私どもは予想をはるかに超えて国のほとんどあらゆる地域から陛下の臣民の不満の声および不安が生じてきていることに大変驚いております。これまで宗教の面でも世俗の面でも陛下の法におとなしく従ってきた者たちまでこれに加わっております。この状況は日々増大していっていると見受けられ、私どもはこれをきわめて重大な問題ととらえております。すなわち、新祈禱書の慣行を促したためにすべての階層の人民から上がってきている不満の声と怨嗟の声を考慮すると、そのように思われます。このようなことは、この王国で前代未聞の

出来事です」と。彼らには、この問題を「陛下の深慮のうちに託し、解決方法を示して頂く」ほかなかった61)。

（9 月 10 日、チャールズからの回答）

チャールズに示してやる解決策などなかった。彼は叱りつけるような返事を寄越してきて、その中で自分を除くすべての者のあらをあげつらっていた。そして、新祈禱書の使用を即刻執行せよと命じてあった。新祈禱書の使用を支持しない治安判事は、いかなる自治都市においても官職を保持することは許さぬといって62)。

（9 月 18 日、新しいエディンバラ市長）

エディンバラでは、チャールズの教会システムの数少ない支持者が役人階層の中になおも見受けられた。公文書保管官のサー・ジョン・ヘイ63)が、抵抗する市民に対して市長（Provost）として押しつけられてきた。しかし、ほかの所ではそのようなお膳立ては無理であった。ベイリーは書いている。「もしもそれが強く主張されれば、どこの町でも治安判事などもてません。いたとしたら、軽蔑に値する人物でしょう」と64)。

61）原注：Act of Council, Aug. 25.　The Scottish Council to the King, *Baillie*, 449, 451. Traquair to Hamilton, Aug. 27.　Burnet, *Lives of the Dukes of Hamilton*, ii. 18.　（*HE8*, 319-320）

62）原注：国王より枢密会議宛て 9 月 12 日書簡。*Baillie*, i. 452.　（*HE8*, 320）

63) Sir John Hay (1578-1654)　30 年に渡りエディンバラおよび勅許自治都市のために働いてきて、チャールズ 1 世が即位すると彼に気に入られて出世の階段を登っていく。（ref: J. A. Hamilton, revised by A. J. Mann, *Hay, Sir John, Lord Barro*, DNB）

64）原注：*Ibid.* i. 25.　（*HE8*, 320）

訳注：参考箇所を読んでみると、枢密会議から命令が来て、これよりすべての自治都市において、治安判事は当局の意向に従う者以外は選ばれてはいけないということになったとある。そして、それを受けてベイリーは、「そのような法が強く主張されるのなら、どこの町でも治安判事などもてなくなる。いたとすれば、よっぽど軽蔑に値する人物だ」といっている。本文では「それが」の「それ」は、前の文の「そのようなお膳立て」を受けているということになるだろう。

（抵抗が全面的に広がる）

どこでも新祈禱書を朗読しようとした牧師は、とくに女性たちからひどい目にあわされた。枢密会議が国王からの最新の書簡を検討するために集まったとき、その命令を実行するのに何もできないことは明らかであった。請願書があらゆる方面から舞い込んできた。20 人の貴族がその後ろに多数のジェントルマン、牧師を従えて枢密会議に出頭し、自分たちの存在によって請願書の文言を強制しようとしてきた65)。

（9 月 20 日）

枢密会議は、最善を尽くしたことを国王に保証するしかなかった。それと同時に、68 通の請願書を彼のもとに送り、熟読を乞うた66)。

65）原注：*Rothes*, 7.　*Baillie*, i. 33.　(HE8, 320)

66）原注：枢密会議より国王宛 9 月 20 日。*Baillie*, i. 453.　(HE8, 320)

⑸エディンバラの第 2 騒擾

（9 月 25 日、エディンバラにおける第 2 騒擾）

まもなく、枢密会議は国王にさらに悪い知らせを送らなければならなくなった。エディンバラの新市長が、市民が新祈禱書に反対する請願書を送ろうとするのを妨げようとしたのだ。怒った暴徒は市議会が開かれている市政会館（Tolbooth）に押し入ってきた。そして、叫んだ。「我々は新祈禱書なんか絶対に受け入れないぞ！」と。彼らは治安判事たちに請願書は絶対に送ると約束させた。このように暴徒が再び表舞台に現れてきたことに、主教に対して何の愛着ももっていない者の中にも驚く者が現れた。ベイリーは書いている。「これからどうなるのか神のみぞ知る。我々の国にかつてこんな騒ぎが起こったことはなかった。皆が、カトリックが自分たちの足元まで迫ってきていると考えている。（中略）誰も国王のために公の場でしゃべることができない。将来殺されてもいいのなら別だが。私は、スコットランド人は血に飢えた悪魔にとりつかれていると思う。それは私が想像できる範囲をはるかに超えている。たとえラテン語でミサが行われたとしてもそんなのはまだたいしたことない。自分の心を制御できる牧師たちは、自分たちには非キリスト教的な気質はないというが、しかし、彼らは主教たちの誘惑的な精神に反発しているほどは、自分たちの激怒という悪魔に対しては反発していないのである」と67)。

（チャールズの粘り）

―スコットランド牧師から発せられた言葉がこのようなものであったならば、チャールズの怒りはいかばかりのものであっただろうか。ホワイトホールの廷臣たちは、ロードの干渉がなければチャールズは譲歩していたであろうと思っていたかも知れない68)。しかし、それよりもはるかにありえることは、チャールズはロードがいようといなかろうと、それが己の義務の道だと信ずる方向にこだわったであろうということである。「どうなさいますか」と聞かれたとき、彼の口を突いて出てきた言葉は「私は従ってもらうつもりだ」であった69)。

（10 月 9 日、彼の枢密会議への指示）

67）原注：*Baillie*, i. 23. （*HE8*, 321）

68）原注：Correr to the Doge, Sept. 15/25, Sept. 25/Oct. 2, *Ven. MSS.* （*HE8*, 321）

69）原注：Con to Barberini, Oct. 13/23, *Add. MSS.* 15, 390, fol. 453. （*HE8*, 321）

しかし、そのチャールズでさえも、すぐに従ってもらうことは期待できないということはわかった。彼は、「請願書が主要な課題としている点については、回答を先延ばしにしなければならない」と手紙で書いている。そして、「さしあたり枢密会議としては、宗教問題については何もやることはない。その代わり、最近エディンバラで起きた騒擾の首謀者を罰せよ。また、エディンバラの外から来た者はすべてエディンバラから去るように命じ、従わない者は法の保護外におけ」と命じている70)。

（枢密会議と最高民事法廷は移転すべし）

また、もう１通別の手紙では、枢密会議と最高民事法廷（the Court of Session）の移転を命じている。すなわち、まずリンリスゴーへ、そのあとダンディーへと71)。

もしもチャールズが扱うべき問題が単なる騒擾でしかなかったのならば、国王を不快にさせている町が、「政府機関や司法機関の有益な存在は法に従うことによってのみ確保される」ということを学ぶことは望ましいことであっただろう。しかし、チャールズが問題にしなければならないのは単なる騒擾以上のものだったので、彼が下した強硬措置は彼自身に跳ね返ってきた。すなわち、彼はスコットランド国民に挑戦状をたたきつけることを選んでしまったのである。そして、蒔いた種の刈り取りをしなければならなくなった。

70）原注：国王より枢密会議宛て 10 月 9 日。*Balfour*, ii. 23. （HE8, 321）

71）原注：この書簡は保存されていないが、それに続く布告の中において言及されている。（*HE8*, 321）

（ジョンストン・オブ・ウォリストン）

これらの書簡がエディンバラに届いたとき、請願者たちはまさかこんなに早く返事が返ってくるとは思っていなかったので、皆自分の家に戻ってしまっていた。しかし、彼らは法律家の中でももっとも有能な者、すなわち、アーチボルト・ジョンストン・オブ・ウォリストン72)をあとに残していた。ジョンストンはすぐに緊急を知らせた。

（10 月 17 日、国王の布告）

10 月 17 日、請願者たち、すなわち、黒衣をまとった聖職者たちと陽気な貴族たちが舞い戻ってきた。そして、これから起こることを待った。夕刻、国王の命令の内容

72) Archibald Johnston of Warriston (bap.1611, d.1663)　法律家、政治家。(ref: John Coffey, *Johnston, Sir Archibald, Lord Wariston*, DNB)

がマーケット・クロス73)より発せられた74)。その場所は、伝説によると、かつて幽霊のごとき訪問者が立ち、チャールズの先祖75)をフロデンの戦場76)から神の裁きの

---

73) マーケット・クロス（Market Cross）： マーケット・クロスとは「十字標」と訳され、「市場として使われた広場の中心に建てられた石造りの建造物」である。（ref: 英辞郎 on the Web, 'market cross'）中世の町では一般的なものであり、そこを中心にして市場が開催されたり、国王の布告文が読まれたり、人々がいろいろな目的で集まったり、ビジネスの場として利用されたり、時には公開の処刑場として使われた。エディンバラでは、14 世紀の半ばに、旧市街のハイ・ストリートのセント・ジャイルズ大聖堂の前に建てられた。それは「ラング・ステイン」と呼ばれる石柱を囲むようにして建てられ、戸口があり、そこを入ると階段があり、上の演壇まで通じており、その演壇から国王の布告文が読まれたりした。石柱は高さ 20 フィート（約 6 メートル）ほどであり、てっぺんにゴシック式の柱頭があり、その上に王冠をかぶった一角獣の像があった。1617 年に、国王のパレードの邪魔になるということで移築が決定され、ラング・ステインだけ残して破壊され、そのすぐそばのもう少し通行の邪魔にならないところに新しいものが建てられた。そして、そこにラング・ステインも復活した。本文における「マーケット・クロス」はそれであろう。しかし、1756 年に再び通行の邪魔になるとされ、破壊が決定され、破壊された。しかし、十字標を人々の精神的支柱として懐かしむ声は多く、1885 年に再び、これまでよりさらに通行の妨げとならないところに新しいものが建てられた。それが今日の十字標である。なお、1617 年に破壊されたものは、その場所の記憶をとどめるために、そのあったところに、八角形状にタイルが埋め込まれ、目で確認できるようになった。（ref: HP "Parliament Square, Edinburgh" URL: https://parliamentsquareedinburgh.net/the-mercat-cross/ ）

74) 原注：Proclamations, Oct. 17, *Large Declaration*, 33. （*HE8*, 322）

75) チャールズの先祖：ジェームス 4 世のこと。チャールズ 1 世→ジェームス 1 世→メアリー女王→ジェームス 5 世→ジェームス 4 世（1473－1513, スコットランド王位 1488－1513）である。4 代前の先祖に当たる。

76) フロデン（Flodden）の戦場：1513 年、ジェームス 4 世はスコットランド勢を率いてイングランドに侵入する。しかし、サリー伯が率いるイングランド勢に大いに破られる。そして、ジェームス 4 世も戦死する。実はこの戦いは、始まる前からスコットランドでは評判が悪かった。ゆえに、不吉な予感を表すさまざまな逸話が残されている。その 1 つが以下の通りである。すなわち、戦いが始まる前、ある夜、エディンバラのマーケット・クロスに亡霊が現れて、次々と名前を読み上げた。まるで王が兵士を召集するかのように。その呼ばれた名前の中にジェームス 4 世も入っていた。そして、戦いが始まってスコットランド軍が大敗すると、その時名前を呼ばれた者は全員戦死していたという。そこであの使者は、あの世からやって来た使者ではないかといわれたらしい。（ref: Burton, *History of Scotland*, iii. 240-241）

座に召喚した場所だという。国王の布告文を読み上げたただの役人は、チャールズにとってはまさにこれと同じように不吉の使者であった。その使者は戦場、牢獄、処刑台へと続く道筋を示していたのである77)。

77）つまり、そこからチャールズのそもそもの転落が始まるととらえられている。

⑹エディンバラの第 3 騒擾

（10 月 18 日、エディンバラの第 3 騒擾）

翌朝、エディンバラ中がざわついていた。エディンバラにはロンドンと異なって独立した商業生活などはなかった。よって、枢密会議と最高民事法廷がなくなるということは、取るに足らない地方都市に成り下がることを意味した。住民たちはまさにその生活手段が脅かされ、その災いの原因として主教に対して毒づいた。衣の下に十字架を身につけていると噂されているギャロウェイの主教シッサーフは、怒れる群衆によって市政会館に逃げ込むことを余儀なくされた。さらに別の群衆が治安判事たちを取り囲み、彼らも抗議に加わるように強く主張した。治安判事たちは九死に一生が得られると思い、いわれたことをすべてやった。暴徒はなおも町にあふれており、「神よ、神の大義を守ろうとする者を守りたまえ！　新祈禱書とそれを維持しようとする者を滅ぼしたまえ！」と叫んだ。トラケアーが来て騒動を鎮めようとした。しかし、押し合い、へし合い、倒されたりなどして、退かされた。その際、白い職杖だけでなく帽子とマントまで失った。シッサーフはなおも市政会館に囚われの身であった。市長は、彼のことを助けることはできないとはっきりといった。ほかの者も誰もシッサーフのために指一本動かそうとしなかった。たった 1 つだけ手段が（不名誉な手段であったが）残されていた。前の日にエディンバラを去るように命じられていた貴族やジェントルマンたちが、どうすれば国王の命令にもっともうまく反対することができるかを相談中であった。彼らに枢密会議はメッセージを送り、怒れる群衆に彼らの影響力を行使してくれるように頼んだ。国王を代表する者たちが不可能なことを、その代表たちの敵はいとも簡単にやりおおせた。エディンバラ市長と、ギャロウェイ主教も含む枢密会議全体は、王によって反徒として扱われた者たちの保護下に入ったとき、初めて自分たちの家に帰ることができた78)。

（父親との比較）

41 年前、チャールズの父親は枢密会議と最高民事法廷をエディンバラから移動させることによって、長老派による騒擾（そうじょう）を終息させた79)。彼がそうすることができたの

78）原注：*Rothes*, 19.　*Large Declaration*, 35.　ゴードンはここでも単に *Large Declaration* から借りているだけである。バートン氏のようにゴードンをこの事件のオリジナル・オーソリティーとして扱うことはまったくの過ちである。（*HE8*, 323）

79）ref: *HE1*, ch. 2, pp.64-65.

は、貴族と国全体を自分の味方につけていたからである。しかし、今回枢密会議員たちを護衛して町の中を練り歩いた者たちは、もはや自分たちの父親たちの代の頃とは異なって、王に味方して首都に反旗を翻しているのではなかった。

（一般的嘆願）

国王の布告に対する請願者たちの返答は一般的嘆願であった。そこで彼らは、主教を教会に降りかかる災禍（さいか）の張本人として指弾していて、チャールズに、主教が裁きにかけられることを許可し、そうなると主教は当事者となるので、今回の紛争に関わる事柄を裁く判事としては枢密会議の席に座ることを禁ずるように求めていた80)。

（請願者たち、攻勢に転ずる）

請願書たちはかくして守勢から攻勢へと転じた。彼らは、「法を破ったのは我々ではなくて主教だ」と実質的には言っていた。主教は自分自身が関わっている訴訟の判事を務めるべきではないという要求は、4ヶ月前、イングランドの星室庁でバストウィックの口から発せられて嘲（あざけ）りをもって迎えられた要求と同じものだった。枢密会議の前で熱く行われた議論の中で、シッサーフ主教とサー・ジョン・ヘイは意外な結果を生む提案を投げかけた。すなわち、「請願者の大部分は家に帰ったらどうか。あとに自分たちを代弁するごく少数の者を残して」と。

（請願者は自分たちの代表（commissioners）を選ぶ）

請願者たちは二人のいうことをそのまま受け取った。そして、自分たちの中から代表団を選出した。この時から、もしも国民がその新しく選ばれた代表団のもとに結集するならば、国民は政府をもつことになるだろう。そして、その政府はチャールズの政府とはならないだろう。エディンバラにはこれ以上の騒擾は起こらなかった81)。

80）原注：*Large Declaration*, 42.（*HE8*, 323）

81）原注：*Rothes*, 17.　*Baillie*, 35, 38.（*HE8*, 324）

訳注：代表を選ぶことによって抵抗運動は組織的なものになっていく。